第三編　古代・中世・近世

第一章　松前藩成立以前の夷嶋

第一節　古代蝦夷と「渡嶋」

古代「蝦夷」の問題

「蝦夷」という文字は、普通「エゾ」と読み、近世以降の北海道に住むアイヌ民族を指したり、彼らが住む北海道・樺太・千島などの地域を総称する「蝦夷地」（エゾ地）と同じ意味ととられている。ところが、古代の「蝦夷」は「エゾ」ではなく、「エミシ」と読むのである。

古代の「蝦夷」を「エミシ」と読む最初の例は、『日本書紀』神武天皇即位前紀条にみえる。

夷（えみし）を　一人（ひだり）　百（もも）な人　人は云へども　抵抗（たむかひ）もせず

この歌謡以後六国史では、「夷」「蝦夷」などを「エミシ」と読んだようであるが、まず「エミシ」の語源についてみてみる。「エミシ」の語源にはアイヌ語説と日本語説の二説がある。

アイヌ語説は、樺太アイヌ語の「ヒト」「男」を意味する「エンチュ」（en-chiw）という語があるが、その古い形として想定される「エムチュ」（em-chiw）が「エミシ」に転訛したとする。もう一つは、アイヌ語の「刀剣」を意味する「エムシ・エムス」が「武人」「勇者」の義に転じて「エミシ」になったとする説である。

一方、ここで採用する日本語説は「ユミシ」＝「弓（ゆみ）－人（し）」・「弓（ゆみ）－師（し）」が「エミシ」に転訛したというものである。「エミシ」を弓術に関わらせるものであるが、斉明天皇五（六五九）年に入唐した陸奥蝦夷について、『新唐書』は「その使者須（ひげ）の長さ四尺ばかり、箭（や）を首に珥（はさ）み、人をして瓠（こ）を載せて数十歩に立たしめ、射て中たらざるなし」と述べて、蝦夷の弓術の高さを記しているが、これには蝦夷の狩猟民性、すなわち非農耕性＝野蛮性を強調する意味がある。この「エミシ」を音の類似性から水底を動きまわる「蝦（えび）」と、中国の方位に基づく野蛮人の表現法「東夷」の合成語として、「蝦夷」が生まれたと考えられる。

蝦夷の生態について『日本書紀』景行天皇四十年七月十六日条に、

男女交り居り、父子の別なし。冬は則ち穴に宿り、夏は則ち樔（す）に住む。毛を衣とし血を飲みて、昆弟相疑う。山に登ること飛ぶ禽の如く、草を行くこと走る獣の如し。恩を承けては則ち忘れ、怨を見ては必ず報ゆ。是を以て、箭（や）を頭髻に蔵し、刀を衣の中に佩（は）く。或は党類を聚めて、辺堺を犯す。或は農桑を伺いて人民を略む

とあり、蝦夷は、男女が雑居し父子の別なく、冬と夏の居をもち、毛皮を着け血を飲む。山野の行動は敏捷で、矢を髪の中に差し、刀を衣の中に帯び、農桑の時を伺い人民を略奪している。景行紀が描く蝦夷像は、不道徳で農耕を知らない未開・野蛮な狩猟民である。

このような蝦夷像は、『日本書紀』斉明天皇五年七月三日条に、唐皇帝と遣唐使との間に交わされた蝦夷に関する問答のなかにも表れている。それには、

天子問いて曰く。其の国五穀有りや。使人謹みて答へもうさく。無し、肉を食らい存活す。天子問いて曰く。国に屋舎有りや。使人謹みて答へもうさく。無し、深山の中の樹本に止住す

とあり、蝦夷は五穀（農耕文化）をもたず、肉食生活（狩猟文化）をしており、住居をもたない、きわめて野蛮な生活をおくっていると紹介している。景行紀の蝦夷像とまったく重なるが、このような表現は、中国の漢代に編まれた『礼記』礼運第九に、

昔者先王未だ宮室に有らざるに、冬は則ち営窟に居り、夏は則ち橧巣に居る。

未だ火化有らず、草木の実・鳥獣の肉を食し、其の血を飲み、其の毛を茹る。
未だ麻絲有らずして、其の羽毛を衣す

とみえるように、古代中国の歴史観と瓜ふたつなのであり、『日本書紀』の蝦夷像も中国の歴史観を借用したものとみてよいだろう。

唐皇帝とのやりとりには、蝦夷には三種類あり、遠くから「都加留」「麁蝦夷（えみし）」「熟蝦夷（にぎえみし）」と位置し、唐には毎年朝貢する「熟蝦夷」を連れてきたともある。

考古学の知見によると、七世紀中葉には東北地方の北上川・馬渕川流域などでは稲作が行われており、蝦夷は『日本書紀』が記すようなモノカルチュア的な狩猟民ではない。にもかかわらず、蝦夷を狩猟民として描くのは、当時の唐を中心とする東アジア世界の秩序のもとで、倭国がしかるべき地位を得るために、野蛮な狩猟民が毎年朝貢するくらい倭王の徳が高いことを唐皇帝に示す必要があったのである。

このように蝦夷像は、古代東アジア世界の秩序の中で形成されたもので、すぐれて政治的な産物といえる。したがって、渡嶋（北海道）の蝦夷について論じる際は、『日本書紀』の蝦夷像から一度自由になる必要がある。

「渡嶋（わたりしま）」の登場

『日本書紀』斉明天皇四（六五八）年四月条に阿倍臣が一八〇艘を率いて日本海を北上し、有間浜に渡嶋蝦夷を招集し「大饗」を開いたとある。これが正史での渡嶋の初見である。さらに斉明天皇六年三月条では阿倍臣が「大河」の辺で渡嶋蝦夷と粛慎（みしはせ）に出会っている。

渡嶋の現地比定については大きく分けて津軽半島説と北海道説の二説ある。津軽半島説は、「『シマ』という邦語が必ずしも海水に囲繞してゐる土地をさすとは限らない」（津田左右吉「粛慎考」）として渡嶋を津軽半島に求めた津田左右吉の見解に代表される。しかし、「シマ」は海水に囲繞されていてもいいわけで、北海道説が否定されたことにはならない。いま一度、関係史料を検討する必要があろう。

『日本後紀』弘仁元（八一〇）年十月二十七日条に

陸奥国言す。渡嶋狄二百余人、部下の気仙郡に来著す。当国の所管に非ずして之を帰去せしめんとす。狄等云わく。時これ寒節にして海路越え難し。願わくば来春を候ち、本郷に帰らんと欲す。

とある。渡嶋蝦夷が太平洋の三陸海岸南端に位置する気仙郡（現気仙沼あたり）に漂着したため、来春までそこに留まることを許されている。また『日本三代実録』貞観十七（八七五）年十一月十六日条には

出羽国言く。渡嶋荒狄反叛す。水軍八十艘、秋田・飽海両郡の百姓二十一人を殺略す。牧宰に勅し之を討平す。

とあり、渡嶋蝦夷が反乱を起こし、水軍八〇艘を率いて、日本海側の秋田・飽海郡の二一人を殺害している。両史料から推すと、渡嶋は陸奥・出羽両国へ海路でなければ行けない場所となる。また、「津軽自（よ）り渡嶋に至る」（『藤原保則伝』）とあるように、津軽と渡嶋は明らかに別の地域を指している。津軽とも異なり、陸奥・出羽国に船でなければ到達できない場所となると、北海道、とくに道南から道央部にかけての地域とする可能性が最も高い。

七世紀の半ばに登場する渡嶋蝦夷は、その後九世紀末までその名前を歴史上にとどめる。そうすると古代国家側が、続縄文文化期から擦文文化期の担い手を渡嶋蝦夷と呼称したと考えられる。いずれにしても、斉明天皇紀の阿倍比羅夫の記事は、北海道と本州の交流が史料的に七世紀半ばまでさかのぼることを示している。

第二節　渡嶋蝦夷と律令国家

阿倍比羅夫の北征と渡嶋ルート

大化の改新から一二年たった斉明天皇四（六五八）年から三年連続で阿倍比羅夫が日本海を北征した記事が『日本書紀』にある。一回目の遠征は『日本書紀』同年四月条によると、次のような経過をたどった。

阿倍臣（闕名）、船師一百八十艘を率い、蝦夷を伐つ。齶田、渟代の二郡の蝦夷望み怖じ降を乞う。是において軍を勒へし船を齶田浦に陳ぬ。齶田蝦夷の恩荷進み誓いて曰く。官軍の為に弓矢を持たず。但し奴らの性、肉を食らうが故に持つ。若し官軍の為に以て弓矢を儲へば、齶田浦の神知りぬ。将に清白なる心をもって朝に仕官せん。仍って恩荷に授けるに小乙上を以てし、渟代津軽二郡の郡領を定む。遂に有間浜に於いて渡嶋蝦夷等を召し聚め、大いに饗して帰す。

阿倍比羅夫は船一八〇艘を率いて北征したが、齶田（秋田）、渟代（能代）二郡の蝦夷は怖気づき、降伏を求めてきた。船を齶田浦に連ねた比羅夫側に、齶田蝦夷の恩荷は「われらは官軍を撃つために弓矢を持っているのではなく、肉を食すために持っているのです。もし官軍のために持っていたなら、齶田浦の神がそれを見抜くでしょう。清い心をもって仕官しましょう」と述べた。恩荷に位階を授け、渟代・津軽の郡領を定めた。さらに有間浜に渡嶋蝦夷を招集し、「大饗」を催したという。

「大饗」は、律令の規定によると蝦夷に飲食・禄物を供給し、服属させる手段ととらえられている。この時期、阿倍比羅夫は「越国守」に就いており、大和王権は彼をとおして渡嶋蝦夷を服属させようとしていたことがうかがえる。

さて、二回目の北征は『日本書紀』斉明天皇五年三月条に次のように記されている。

阿倍臣（闕名）、船師一百八十艘を率い、蝦夷国を討つ。阿倍臣飽田、渟代二郡の蝦夷二百四十一人、其の虜三十一人、津軽郡の蝦夷一百十二人、其の虜四人、胆振鉏蝦夷廿人を一所に簡集して大饗して禄を賜う。（略）即ち船一隻と五色の綵帛を以て、彼の地神を祭る。肉入籠に至る時、問菟蝦夷胆鹿嶋、菟穂名二人進みて曰く。後方羊蹄を以て政所と為すべし。（略）胆鹿嶋等の語に随いて遂に郡領を置きて帰る。

阿倍比羅夫が一八〇艘を率い、飽田（秋田）・渟代蝦夷、津軽蝦夷、胆振鉏蝦夷らを集めて「大饗」を催し、禄物を与えた。また船一艘と五色の綵帛を当地の神に祀った。肉入籠に至った時に、問菟蝦夷胆鹿嶋と菟穂名の二人が「後方羊蹄に政所（蝦夷郡）を置くべきだ」と進言したので、郡領を置いたとある。

飽田・渟代・津軽は前年もみえた地名であるが、胆振鉏以下は初見であり、現地比定するのは難しく、青森から北海道にかけて複数の候補地があがっている。たとえば、後方羊蹄については、続縄文文化から擦文・アイヌ文化期にかけて、多様な遺物が出土している余市町大川遺跡に比定する見解もあるが、「深浦付近、市浦村付近、青森市後潟付近、青森市松森付近などに比定する説」（『角川日本地名大辞典』2青森県）もあり、日本海側を北上する地域と、津軽海峡側を陸奥湾側に入る地域に大別できる。

三回目は、斉明天皇六年三月条に、今回の北征の主因が粛慎にあったことを次のように記している。

阿倍臣（闕名）、船師二百艘を率い粛慎国を伐つ。阿倍臣陸奥蝦夷を以て己が船に乗せしめ大河の側に到る。是に於いて渡嶋蝦夷一千余海畔に屯聚し、河に向かい営す。営中の二人進みて急に叫びて曰く。粛慎の船師多く来りて将に我等を殺さんとするの故、河を済りて仕官を願い欲さん。阿倍臣船を遣

わし両箇の蝦夷を喚び至り、賊の隠所と其の船数を問う。両箇の蝦夷便ち隠所を指して曰く。船廿余艘。即ち使を遣わし喚びても肯て来たらず。阿倍臣乃ち綵帛・兵・鉄等を海畔に積みて貪嗜ましむ。粛慎乃ち船師を陳ね羽を木に繋ぎ、挙げて旗と為す。棹を斉しくし近づき来りて浅処に停め、一船裏より二老翁出て、廻行きて積む所の綵帛等の物を熟視す。便ち単の衫に換著し、各布一端を提げ、船に乗り還去す。俄かに老翁更に来り換え衫を脱ぎ置き、並びに提げ布を置き、船に乗りて退く。阿倍臣数船を遣わし喚ばしむも肯て来たらず。幣賂弁嶋に復り、食頃して和を乞う。遂に聴すことを肯てせず。（略）己が柵に拠りて戦う。時に能登臣馬身龍敵が為に殺さる。猶戦い未だ倦まざる間に賊破れて己が妻子を殺す。

二〇〇艘の船を率いた阿倍比羅夫は陸奥蝦夷を同行し、「大河」の辺に至った。そこは一〇〇〇あまりの渡嶋蝦夷が駐屯していたが、その中から二人がやって来て「粛慎の船が多く来て、我らを殺そうとしているので、あなたに仕えたいと思います」と叫んだ。比羅夫はこの蝦夷を招きよせ、賊の隠れている所や数を尋ねたところ、二〇艘ほどであった。比羅夫は、綵帛・兵器・練鉄を「海畔」に積み上げて、誘いをかけた。すると、粛慎が船を列ね、羽を木に付け旗のようにし、棹を揃えて浅い所に停泊した。船から二人の老翁が出てきて、綵帛などを熟視してから単衣に着替えて、布一反ずつを抱えて船に戻った。ところが老翁が再び来て単衣を脱ぎ、布も置いて船に戻った。

この部分は、沈黙交易の示す史料としても有名である。沈黙交易とは、言葉を用いることなく行われる交易。異種族間の交易手段として広く行われる。定められた場所に品物を置き、合図して姿を消すと、相手が等価と思われる品物をそのそばに置いて下がる。等価物に満足すれば、相手の品物を持ち帰り、交易が成立する（『改訂文化人類学事典』）。

という理解がされているが、ここでは、粛慎が海畔に積み上げられた綵帛・兵器・練鉄の中から綵帛を持ち帰ったが、粛慎の側に等価と思われる品物が見当たらない。この場合は、単なる沈黙交易というより、粛慎が品物を持って行くことによって生ずる服属関係が期待されたのではないか。一連のやりとりは、沈黙交易的な作法を採り入れた服属関係を創出する儀式と察せられる。

さて、綵帛を戻した粛慎を比羅夫は呼び戻そうとしたが、彼らは弊賂弁嶋に帰ってしまった。当該条の分注によると、「弊賂弁、渡嶋の別なり」とあり、粛慎は渡嶋とは異なる島に拠点を置いていたように読める。ただし、北海道は平安時代後期以降、蝦夷ヶ千島と呼ばれることがあったように、古くから北海道が多くの島からなっているという地理認識があることから推すと、弊賂弁嶋が渡嶋から独立した島であったとは確言できない。

粛慎はしばらくして和を求めてきたが、比羅夫はそれを聴きいれなかったため、粛慎は彼らの柵にたてこもり戦った。この時、能登臣馬身龍は敵のために戦死した。戦いがまだ盛んな時に粛慎は破れ、妻子を殺害してしまった。

結局、今回は粛慎との間に服属関係は成立しなかったが、もしここで粛慎が綵帛を戻さなかったなら、阿倍比羅夫はこの北征で渡嶋蝦夷に加えて粛慎の北方二集団を服属させることに成功したはずである。

その意味では阿倍比羅夫の一連の活動は、大和政権の意を受けて、日本海の北方に広がる地域を調査し、先住の渡嶋蝦夷と粛慎との間に一定の服属関係を設定することが目的だったと察せられる。

ところで比羅夫が渡嶋蝦夷と粛慎に遭遇した「大河」とはどこなのであろうか。前述したように渡嶋が北海道で、しかも三回の遠征で徐々に日本海を北上したとすると、該当する「大河」は石狩川が想定できる。石狩川

流域とその周辺に広がる石狩低地帯は縄文時代から文化の交差点のような地域で、比羅夫が渡嶋蝦夷や粛慎に出会う場としてふさわしい。

しかしこの時期、東北地方の三陸海岸を北上するルートもあったと推定できる。『続日本紀』霊亀元（七一五）年十月二十九日条に三陸海岸の閇村に居住する蝦夷須賀君古麻比留が、

先祖以来、昆布を貢献し、常に此地に採ること、年時を闕かさず。今国府の郭下、相去りて道遠し。往還旬を累ね、甚だ辛苦多し

と述べている。三陸海岸の閇村（八戸周辺か）では、八世紀初頭すでに先祖以来、陸奥国府と交易していたことが記されており、七世紀には大和王権と独自の関係を結んでいたことがうかがえる。

また青森県八戸市の鹿島沢・田面平、上北郡おいらせ町の阿光坊には「末期古墳」が検出されており、この地域の蝦夷が大和王権の影響を受けながら、太平洋岸を北上して渡嶋蝦夷と交流していたことが想定される。「末期古墳」の系譜を引く「北海道式古墳」が恵庭・江別から見つかっているが、これらは太平洋ルートにより伝播した可能性は十分ある。

かつて河野広道は胆振地方が北海道の中心地だったのではないかと推測したことがある（『苫小牧地方古代史』）。また最近蓑島栄紀は、千歳市ウサクマイ遺跡群の意義に注目しつつ、白老にある「飛生」（トビウ）という地名が、斉明天皇五年条に見える「問菟」である可能性に言及し、「問菟蝦夷」が本州との交流の玄関口として太平洋側の出入りを取り仕切る集団とする仮説を紹介している（「北海道と胆振地方の古代史」）が、太平洋ルートが想定できるなら、胆振地域が北のターミナル的性格をもっていたとみなすことができよう。

時代が下るが、正保元（一六四四）年、松前藩が幕府に提出した「正保絵図」の蝦夷地図によると、日本海側の「イシカリ」（石狩）と太平洋側の「ユフツ」（勇払）の双方から、間にある大きな湖（長都沼）に向かって水路が描かれている。しかも「ユフツ」側には「イシカリ迄廿五里」と記されているように、石狩低地帯を網の目のように走る水路が太平洋側と日本海側を結ぶ交通路と認識されていたことが分かる。

このような地理認識が阿倍比羅夫の遠征以降、徐々に形成されていったのであろう。

図１－１　「正保日本図（蝦夷地部分）」高木崇世芝所蔵

粛慎とオホーツク文化

阿倍比羅夫が斉明天皇六年に「大河」の辺で遭遇した粛慎とは、どのような集団であろうか。年次に問題があるが、比羅夫遠征時の粛慎記事は、斉明天皇四年是年条に、

越の国守阿倍引田臣比羅夫、粛慎を討ち生羆二と羆皮七十枚を献ず

とあるほか、同五年三月条の分注に、

阿倍引田臣比羅夫、粛慎と戦いて帰り、虜四十九人を献ず

と見え、さらに同六年五月是月条には、

阿倍引田臣（闕名）、夷五十余を献ず。又石上池の辺において須弥山を作る。高さ廟塔の如し。以て粛慎四十七人を饗す

とある。これらの記事はいずれも斉明天皇六年条に配列されるべきとの見解が出されており、従うべきであろう。

斉明天皇六年、渡嶋に遠征した比羅夫軍は、粛慎との戦いに勝利を収めた結果、戦利品として生きたヒグマ二頭とヒグマの皮七〇枚を獲得し、それらを朝廷に献上し、さらに飛鳥の石上池の須弥山で粛慎の捕虜四九名（四七名か）に饗宴を開いている。

このほかにも『日本書紀』の粛慎関係の史料は四つあり、あわせて八例ある。これらの史料から言えることは、粛慎には日本海ルートを南下するものと、朝鮮半島ルートで大和王権と関わりをもつ二タイプあることである。

日本海ルートの粛慎の初見例は『日本書紀』欽明天皇五（五四四）年十二月条に、

越の国言す。佐渡嶋北御名部碕の岸に粛慎人有り。一船舶に乗りて淹留し、春夏魚を捕え食に充つ。彼の嶋の人、人に非ずと言う也。亦鬼魅（おに）と言い、敢えて近づかず

とあるように、粛慎が佐渡島に出没している。彼らは春から夏にかけた漁をしていたが、島民は「人に非ず」、「鬼魅」と呼んで近づかなかったという。

また、持統天皇十（六九六）年三月十二日条には越の渡嶋蝦夷伊奈理武志（いなりむし）と粛慎志良守叡草（しらすえさう）が絁（つむぎ）や斧などを賜れている。阿倍比羅夫との戦い以後、絶えていた粛慎との関係が七世紀の末には復活し、渡嶋蝦夷とともに賜物されているところをみると、渡嶋蝦夷と粛慎との関係も正常化していたのであろう。

このように日本海海域を舞台にする粛慎は、五世紀から一三世紀ごろにかけてサハリン南部・北海道のオホーツク海側・千島列島に展開したオホーツク文化の担い手とする見方が定説化している。オホーツク文化はアムール川（黒龍江）下流域を故郷とし、流氷原に沿うように北海道まで広がる海洋性の文化である。礼文島の香深井1遺跡の事例によると食料は、魚類・海獣など九〇（ケイ）以上を海に依存しているが、食料の乏しくなる夏季は、小規模なキャンプに分かれていたと想定されている（大場利夫・大井晴男『香深井遺跡（上）』）。

その点、前述のように粛慎が佐渡島で春から夏の間、魚を捕らえて生活していたとする記事は、夏のキャンプを彷彿とさせる。また平成十四（二〇〇二）年に奥尻島青苗で六～七世紀ごろとみられるオホーツク文化の青苗砂丘遺跡がみつかっているが、オホーツク人が想像以上に日本海を南下して活動していたことが確認された。日本海ルートで出現する粛慎は、春夏の間、食料を求めて奥尻島・佐渡島まで南下したオホーツク文化人とみることができよう。

朝鮮半島ルートで出現する粛慎は、天武天皇五（六七六）年十一月是月条に「粛慎七人、清平等に従い至る」とみえる粛慎が該当する。新羅使金清平が来朝する際に、粛慎七名を帯同したというのである。また、持統天皇八（六九四）年正月二十三日条には「務広肆等の位を以って、大唐人七人と粛慎二人に授ける」とあるが、これも唐人にともなわれて来日した粛慎とみることができよう。これらの粛慎は日本海を南下してきたのではなく、朝鮮半島を経由してやってきているのである。

ところで中国の粛慎は、もともと極めて説話的な色彩が強い存在である（『国語』）が、二～四世紀くらいになると、沿海地方に実在する勿吉（もつきつ）や挹（ゆう）

婁諸族を指すようになり、六世紀後半以降、勿吉は靺鞨と呼ばれるようになる。また挹婁は三世紀ごろには沿海州からアムール川下流域を拠点とし、五、六世紀ごろには著しく西方に進出した。

では朝鮮半島ルートの粛慎は、オホーツク文化人なのであろうか。『隋書靺鞨伝』によると、靺鞨は高麗の北に七種あるが、その東が古の「粛慎氏」の地であるという。金清平が連れてきた粛慎はアムール川の中流域に居住し、雑穀栽培、ブタ・イヌ飼育、狩猟などを生業としていたと思われ、海洋性のオホーツク人とは明らかに異なっている。

『日本書紀』の編者は、漢籍の情報を入手していたはずであるが、日本海ルートのタイプと朝鮮半島ルートのタイプを同じ粛慎と呼称していることから推すと、『日本書紀』の編者は、アムール川下流域に故地をもつオホーツク人とアムール川中流域に居住する「粛慎氏」を同じ呼称で呼ぶかなりラフな認識を持っていたと察せられる。

「北海道式古墳」と千歳

阿倍比羅夫が斉明天皇四年から六年にかけて開いた北方ルートを通して、その後ヒト・モノの交流が盛行し、本州の文化が道央部とくに石狩低地帯を中心に伝来することになる。カマドを持つ住居、文様がない土師器、硬質の須恵器、鉄製の農耕具・武器などが各地から出土するようになる。採集・漁撈・狩猟の続縄文文化に本州の農耕文化を取り入れ、複合文化である擦文文化が石狩低地帯を中心に道内各地に拡がっていく。

この擦文文化の担い手を考える上で見逃すことができないのが、八世紀から九世紀にかけて石狩低地帯に造られた「北海道式古墳」である。「北海道式古墳」は昭和六（一九三一）年に江別市元江別の旧豊平川の河岸段丘上に二十数基発見され、それを発掘したところ、毛抜形刀・蕨手刀・刀子・勾玉・耳環などが出土した（表１－１）。

その後、昭和五十五（一九八〇）年の再調査によると墳丘は円形もしくは長円形で、環状か馬蹄形の周溝がめぐらされている。周溝の規模は径八～一〇メートルの大型、五～七メートルの中型、五メートル以下の小型の三タイプに分けられ、墳丘の高さはほとんどが一メートル未満であり、三〇センチに満たないものもある。内部には東南方向に頭蓋骨片、遺体右側に刀類と考えられる鉄製品の痕跡が確認された。また周溝から、造営後の儀礼に関わったものと思われる土師器と須恵器、他に鉄鏃・刀子・鋤先などの鉄器、土製の紡錘車が出土している。

この古墳群の東方一・五キロの所にある旧町村牧場からも二基見つかっているが、千歳市に隣接する恵庭市茂漁川の河岸段丘上から一四基（柏木東遺跡）が発見されている。恵庭の古墳群と江別古墳群は、形態・構造的にほとんど変わるところがなく、両者が相互に緊密な関係を持って造営されたことを示唆している。とくに江別と恵庭は千歳川水系で結ばれており、血の交流を含む広いつながりがあったことが想定できる。

ところで近年、「北海道式古墳」と関わりが想定される墓が相ついで発掘されている。馬蹄形の周溝と八センチの墳丘を持つ千歳市のユカンボシC15遺跡の墓、一メートルを超えない墳丘を持ったと思われる恵庭市の柏木川1遺跡の墓（北海道文化財保護協会『柏木1遺跡』）、耕作により削平され墳丘は確認できないが、両端が途切れている周溝と墳丘を持つ恵庭西島松5遺跡の墓（X－6）である（道埋文『西島松5遺跡』）。これらは、明らかに東北北部の墓制の影響を受けながら、微妙に異なる外部構造を持っているが、これらの「北海道式古墳」とそれに関わる墓を通して、東北北部から入ってきた末期古墳の影響がまず外部施設に現れ、ついで葬送儀礼を反映する主体部構造・埋葬姿勢の変化が現れてくることから、造営の主体者は地元の渡嶋蝦夷であると説く研究がある（鈴木信「北海道式古墳の実像」）。従うべ

表1－1　「北海道式古墳」関連遺跡

関連遺跡名	主な遺物	築造推定年代
江別古墳群（後藤遺跡）	土師・須恵・大刀・蕨手刀	8世紀中葉～9世紀後葉
旧町村牧場遺跡	須恵・大刀	8世紀末　～9世紀前葉
茂漁遺跡（柏木東遺跡）	土師・須恵・大刀・蕨手刀・鈎	8世紀中葉～9世紀前葉
柏木川1遺跡	土師	8世紀中葉
ユカンボシC15遺跡	土師・須恵	8世紀後葉～9世紀前葉
西島松5遺跡	須恵・大刀	8世紀中葉～9世紀前葉

きであろう。

これら以外にも苫小牧市植苗と千歳市長都に「北海道式古墳」があった可能性が指摘されている（河野広道『苫小牧古代史』）ほか、明治十一（一八七八）年にエドワード・モースが発掘した札幌農学校敷地内の土盛り状のものも「北海道式古墳」の可能性がある（天野哲也「古墳の築かれなかった地域－北海道」）ように、石狩低地帯には既知以外の「北海道式古墳」があった可能性は否定できない。

渡嶋交易と千歳

江別・恵庭の渡嶋蝦夷は、律令社会との交易関係における優位な立場をシンボリックに表示する構造物として「北海道式古墳」を築造したと思われる。その意味で「北海道式古墳」は、本州文化のショーウインドウとして、石狩低地帯のみならず他の地域を擦文文化へと促す役割を果たしたといってよかろう。

七世紀半ばの渡嶋蝦夷のなかには斉明天皇四（六五八）年に「有間浜」で阿倍比羅夫が設けた大饗に参加した者がいたり、六年に比羅夫が大河の側に到達した時、一千余の渡嶋蝦夷の中から二人の者が救援を求め、「粛慎」の隠れ所・船団数などの情報を比羅夫軍に提供している。「大河」が石狩川とすれば、石狩低地帯の蝦夷社会には複数の首長的な存在がおり、交易や戦争時に指導的な役割を果たした者がいたことを示唆している。

彼らのような存在が『続日本紀』養老四（七二〇）年正月二十三日条にみえる「渡嶋津軽津司」のような職掌を生み出した原動力であったのであろう。すなわち、「渡嶋津軽津司」は、「靺鞨国」に遣わされ、その風俗を視察していることからすると、津司の職掌は港・航路の管理のほかに、北方社会との交渉・交易なども含まれていたようである。「渡嶋」との間には恒常的な交易が成立しはじめていたのではなかろうか。古代国家が「靺鞨国」との間にも交易の可能性を探るほどに、渡嶋・北方地域の交易が活発化していたことを物語っている。

たとえば、『扶桑略記』養老二（七一八）年八月十四日条に、

出羽并渡嶋蝦夷八十七人来りて、馬千疋を貢ぐ。則ち位禄を授く

とある。渡嶋蝦夷が出羽蝦夷とともに馬を朝貢し、位階を授かっており、八世紀初頭から渡嶋蝦夷が「馬」の交易に関わっていたことが知られる。

また、延暦二十一（八〇二）年六月二十四日に次のような太政官符が出されている。

私に狄の土物を交易するを禁断する事

右右大臣の宣を被るに偁らく。渡嶋狄等来朝の日、貢ぐ所の方物は、例（あらまし）雑皮を以てす。而るに王臣諸家競いて好皮を買い、残る所の悪物を以て官に進めんとす。仍て先ず符を下し禁制すること已に久し。而るに出羽国司寛縦し曾て遵奉せず。更為る之道、豈此の如くべけんや。自今以後、厳しく禁断を加え、如（も）し此の制に違わば、必ず重科に処さん。事勅語に縁り、重ねて犯すことを得ざれ。

律令政府は貴族に対し、渡嶋蝦夷と私的な交易を禁止する太政官符を出したのである。しかし太政官符に「禁制すること已に久し」とあるように、かなり以前から渡嶋と出羽の交易が続いていたことをうかがわせる。前述の「馬」交易が八世紀の初頭に始まっていることから推すと、七世紀末に

はすでに始まっていたとみることができよう。

ところで、渡嶋蝦夷がもたらした交易品は「雑皮」とある。「雑」は「くさぐさ」と読ませ、種類の多いさまを意味している。すなわち、いろいろな皮がもたらされ、それを貴族の従者たちが競って買い求めている。一〇世紀初頭に編纂された『延喜式』によると、貴族社会では貂皮・虎皮・羆皮が上着・馬具などに用いられているほか、牛・馬・猪などの皮が儀式・宴会などの敷物として用いられている。なかでも希少価値の高い毛皮は身分標識の役割を果たしていた。

渡嶋蝦夷が交易した「雑皮」の代表的なものとして羆皮があげられる。『延喜式』（巻二三、民部下）に記載されている交易雑物に、

出羽国熊皮甘張。葦鹿皮。独犴皮得る数に随がえ

とあり、出羽国が中央に貢上する品は、「熊皮」・「葦鹿皮」・「独犴皮」であった。この「熊皮」が北海道を除いた本州など三島に生息するツキノワグマであれば、出羽国のみが貢上する理由が説明できなくなる。この「熊皮」は渡嶋蝦夷との交易で入手したヒグマのものとみて間違いない。

なお、「熊皮」以外に出羽国の交易雑物は「葦鹿皮」・「独犴皮」も「雑皮」に含まれよう。「葦鹿」は、食肉目アシカ科の海獣で、太平洋からオホーツク海に生息するオットセイ・トドも同じ科に属し、敷物などに利用されていた。「独犴」はトナカイ、トッカリ（アザラシ）説のほかに北方アジアの野犬説もあるが、「葦鹿」と一括りにされていることからするとオホーツク海に生息する海獣とみることもできるが、いずれにしろ北方系の動物である。

そうすると「雑皮」のなかには、オホーツク人が捕獲した毛皮を擦文人が交易で入手し、それを出羽・陸奥両国が交易雑物として手に入れ中央に進上したものと推定することができる。このように「雑皮」交易の背後には、オホーツク文化－擦文文化－本州文化という交易圏の広がりを想定することができる。

そこで注目されるのが平成十二（二〇〇〇）年に発掘された千歳市ウサクマイN遺跡である。この遺跡は擦文文化期に属しているが、興味深いのは二枚の富壽神寶と一個のオホーツク式土器の出土したことである。

富壽神寶は、皇朝十二銭のうちの五番目にあたり、弘仁九（八一八）年から承和二（八三五）年にかけて鋳造されたものである。出土した二枚とも内側縁の磨耗がないため、鋳造されてから間もなくウサクマイに持ち込まれたらしい。オホーツク式土器は、口径一〇・一センチ・底径六・一センチ・器高一二・七センチと小さな完型の壷である（道埋文『ウサクマイN遺跡』）が、用途は不明である。

ウサクマイN遺跡から富壽神寶とオホーツク式土器が出土するのは、千歳を含む石狩低地帯が擦文文化圏の中心にあり、かつ本州文化とオホーツク文化が交差する場であることを示している。千歳の擦文人は日本海へも太平洋へも水路を使って容易に出られる地理的条件を活かしながら、南北文化との交流を積極的に進めていた様子がうかがえる。

元慶の乱と渡嶋蝦夷

元慶二（八七八）年三月十五日、出羽蝦夷は反乱を起こして「秋田城并郡院屋舎城辺民家」を焼き落とした。翌年にかけて戦乱に巻き込まれた出羽国は多くの避難民を生み出し混乱を極めた。

この乱の原因について『藤原保則伝』は、

秋田城司良岑近は、聚め斂むるに厭うことなく、徵り求むるに万端なり。故に怨を畳ね怒を積りて叛逆を致せり

とあるように、秋田城司の苛斂誅求を反乱の原因に求めている。元慶元年は不作で飢饉に悩まされており、反乱の背景に秋田城司の苛政があったこ

とは、『三代実録』元慶三年三月二日条に「国内の黎氓、苛政に苦来し、三分の一は、奥地に逃入す」るとあることからも十分考えられる。

一方で『藤原保則伝』は、出羽国の様子をつぎのように表現している。

民夷雑居して、田地膏腴に、土産の出づるところ、珍貨多端なり、豪吏并せ兼ぬること、紀極あることなく、私に租税を増して、恣に徭賦を加へつ。また権門の子の年来善き馬良き鷹を求むる者、猥しく聚ること雲のごとし。

このように、出羽国には「珍貨」・「善き馬良き鷹」を求めて、「豪吏」・「権門の子」などが群がっている。交易によるヒト・モノの往来の複雑な絡みが「民夷」間の利害関係の対立を生み出し、それが反乱の背景にあったとみることができる。

ところで乱の三年前の貞観十七（八七五）年十一月に渡嶋荒狄が反乱を起し、水軍八〇艘で秋田・飽海両郡を襲った。渡嶋蝦夷が秋田城のある秋田郡とそれに南接する飽海郡を襲い、百姓二一名を殺害したというのである。

この事件と元慶の乱に関係があるのかは不明であるが、『三代実録』元慶三年正月十一日条に、

渡嶋の夷首百三人、種類三千人を率い、秋田城に詣でる。津軽俘囚と賊に連ならざる者百余人、同じく共に聖化に帰慕す

とあり、「渡嶋の夷首百三人」が三〇〇〇人を率いて、反乱に加担しなかった「津軽俘囚」百余人とともに秋田城に帰服している。このことから渡嶋蝦夷は元慶の乱に加わらなかったことがうかがえる。すなわち渡嶋蝦夷は、貞観十七年に反乱をおこしたにもかかわらず、今回は乱に関わらなかったように、時により出羽蝦夷や津軽蝦夷とは異なる動きをとったのである。

律令国家から「蝦夷」と一括してとらえられていながら、渡嶋蝦夷が自律的な選択をすることは注目される。その点で、考古学からの指摘は注目される。すなわち、八世紀末葉まで北海道と東北北部が土器形式において一体化しているが、九世紀以降東北北部と東北南部が斉一化する一方、津軽海峡をはさみ東北と北海道が「分断」される。これは擦文土器の発生にかかわる見解であるが、七世紀から八世紀にかけて古代王権・国家とのかかわりで、続縄文文化から擦文文化へと変貌を遂げていた渡嶋蝦夷が、九世紀以降津軽海峡をはさみ「分断」され、急速に擦文化を推し進め、独自性を強めていったというのである。

第三節　奥羽の戦乱と「夷嶋」

「渡嶋」から「夷嶋（えぞがしま）」へ

『日本紀略』寛平五（八九三）年閏五月十五日条に「渡嶋蝦夷」と「奥地俘囚」との間に戦闘が起こりそうな状況が報告されているが、これ以降「渡嶋」という呼称は史料から姿を消すことになる。「渡嶋」とは「渡って行く嶋」という意味をもち、本州側で作った和語であろう。

この呼称が姿を消すのは、一〇世紀以降新たな国史が編纂されなかったという史料的問題とともに北海道の新たな胎動が始まったことを示している。

応徳三（一〇八六）年正月二十三日付の「前陸奥守源頼俊の申状」には、延久二（一〇七〇）年に「衣曾別嶋の荒夷并びに閉伊七村の山徒」を討伐したとある。討伐の詳細は不明であるが、「衣曾別嶋」を「エゾノワケシマ」と読み、「夷嶋」（北海道）とする見解がだされている（熊田亮介「蝦夷と蝦狄」）が、従うべきであろう。ただ、なぜ北海道が「エゾ嶋」ではなく、「エゾノワケ嶋」と呼んだのか疑問が残る。その点で興味深いのは、藤原親隆（一〇九九～一一六五）が詠んだ次の和歌である。

えそがすむ　つかろの野辺の　萩盛　こやにしきゝの　たてるなる覧

これは『久安六年御百首』に収められている和歌であるが、久安六（一一五〇）年に「えそ」が住む地域は「つかろ」（津軽）とされている。この時期のほかの和歌を見ると「えそ」の住む地域は、津軽地方から北海道とみられていた。しかも「えそ」の本拠地は、津軽地方という認識が王朝貴族のなかにあり、それが「えそがすむ　つかろ」という和歌に反映したのであろう。「衣曾別嶋荒夷」は、「エゾが住む津軽とは別の嶋に住む荒エゾ」が真意と推定される。

ところで「エゾ」という言葉は樺太アイヌの「エンチュ」（enchiw＝人・男の意）と言われている。もともとは擦文人が使っていた「夷語」なのであろう。それが「エンジュ」（enju）となり、さらに「エンジョ」（enjo）、「エゾ」（ejo）に転訛したと考えられる。日本語「蝦夷」（エミシ）が九世紀末ごろまで陸奥・出羽・津軽・渡嶋に居住する集団に使われていたが、一〇世紀以降「異類」としての共通性が津軽と渡嶋に認められるようになると、一二世紀ごろから「アイヌ」語「夷」（エゾ）が使われるようになったのである。

『今昔物語集』巻三一「陸奥国の安倍頼時、胡国に行きて空しく返れる語」という説話には、「其ノ国ノ奥ニ夷（エゾ）ト云フ者有テ」とあり、陸奥国の「奥」の集団、すなわち津軽・渡嶋蝦夷を「夷」（エゾ）と呼称している。前述の和歌の例では一二世紀半ばに「エソ」が歌語となっているように、一一世紀から一二世紀にかけて「エソ」がかなり浸透していたことがうかがえる。これはちょうど同じころに「渡嶋」が姿を消し、「衣曾別嶋」が現れてくるのと軌を一にしている。このような呼称の変化の背景には、北海道で擦文文化を母胎にアイヌ文化が形成される過程があったことを示している。

前九年の役と「防御性集落」

「夷」（エゾ）という「アイヌ」語呼称が使われる一一世紀に、陸奥国司源頼義・義家父子らが、陸奥国の奥六郡（胆沢・和賀・江刺・稗抜（ひえぬき）・志波（しわ）・岩手）を領する在地の豪族である安倍頼時・貞任父子を討つ戦乱が起こった。これが前九年の役（一〇五一～六二）である。

前九年の役が起こった一一世紀をはさむ一〇世紀半ばから一二世紀初頭にかけて、岩手県・秋田県の北部から青森県を主とする東北北部から北海道南部の「北緯四〇度以北」の地域に、環濠・土塁で囲まれた「防御性集

落」が一〇〇近くあるという（三浦圭介他編『北の防御性集落と激動の時代』第二部）。防御性集落は、集落間対立の激化、国司の収奪による社会的緊張の激化、安倍氏・清原氏による圧力の強化などを諸要因として構築されたとする見解があるが、いずれにしろ東北北部が厳しい緊張関係の置かれていたことがうかがえる。

ところで北海道に「防御性集落」は今のところ、渡島半島南部の原口館遺跡（松前町）・ワシリ遺跡（上ノ国町）・小茂内遺跡（乙部町）の三ヵ所しか指摘されていない。

防御性集落は水陸の交通の要衝に分布することが多く、交易により勢力をもった蝦夷の族長が、「拠点集落」として構築したものと考えられている。確かに東北北部では、「奥大道」など交易路沿いに多いが、小茂内遺跡の場合は二、三軒の最少規模の集落で、しかも船泊になるような入江もなく、交易上の要衝とも思えない。この点では原口館遺跡・ワシリ遺跡も同様であり、今後も道南部に新たな環濠集落が発見されないとすると、その密度の薄さから東北北部のものと同一に扱うことは躊躇される。むしろ、海沿いの高台に位置し、航行する船の見張りのような役割を果たしたものと理解した方がいいのかもしれない。

一〇世紀以降の「夷嶋」の交易品は、「鷲羽」・「粛慎羽」・「水豹皮（あざらし）」・「貂裘（てんかわごろも）」などの北方産品とみられる。これらの品はおもに擦文人によって津軽蝦夷のもとに持ちこまれたのであろう。

ところで青森市西部の石江地区に見つかった新田（1）遺跡は、一〇世紀後半から一一世紀前半にかけてのもので、そこから青森県初出土の桧扇をはじめ、祭祀用木製品・木簡などが出土しており、東北や関東の地方官（かん）衙（が）に比肩するもので、この集落は都や関東の文化を受け入れる一方で、北方の特産物を獲得・出荷して交易・流通活動を繰り広げていた事実を示している（鈴木靖民「平安後期の北奥羽社会－北の辺境からのうねり－」）。

東北地方の最北部に見出せる王朝社会と北方社会の交易の痕跡は、この地域の蝦夷が、国衙（こくが）・城柵（じょうさく）・王臣諸家勢力との間で作りだされる複雑な関係のなかで、権益を守るために「防御性集落」を造営したのであろう。

北方社会との窓口となっている新田（1）遺跡が「防御性集落」ではなかったが、それは「防御性集落」が、擦文人と津軽蝦夷との関係で生まれたのではないことを示唆している。だから道南地方では本格的な「防御性集落」を造る必要はなく、わずか三ヵ所の「防御性集落」しか確認できないのではなかろうか。

後三年の役と奥州藤原氏の支配

さきに源頼俊が延久二（一〇七〇）年「衣曾別嶋の荒夷并びに閉伊七村の山徒」を討伐したことを述べた。ちょうどこの時期に前九年の軍功により出羽国山北の俘囚長清原武則が鎮守府将軍に任ぜられ、安倍氏の旧領奥六郡をあわせ持ち、奥羽唯一の大豪族となっていた。清原氏の台頭と「衣曾別嶋」討伐が関わりを持つのか不明であるが、この時期、「衣曾別嶋」に陸奥守源頼俊を向かわせるような動きがあったことには注目される。

さて清原武則の子武貞には、先妻との間に真衡がいたが、藤原経清との間に清衡を生んでいた頼時の女子を後妻に迎え、家衡をもうけた。このように清原氏は極めて複雑な家族構成となっており、武貞の死後、三男子の間で武力抗争が起きる。これが後三年の役の発端である。その後一族の内紛は、源義家が陸奥守に赴任後、次第に清原氏と源氏の対立の様相を強くする。寛治元（一〇八七）年源義家の力を借りて清原家衡を討った清衡は、清原氏・安倍氏の血脈を引く人物として平泉に本拠地をおき、以下基衡・秀衡三代の奥州藤原氏の支配権を確立した。

天治三（一一二六）年、藤原清衡が平泉に中尊寺を建てた時の供養願文

に清衡は、自らを「東夷之遠酋」、「俘囚之上頭」と称し、さらに、

出羽・陸奥の土俗、風に従うこと草の如し。粛慎・挹婁の海蠻、陽に向かうこと葵の類なり

と、「出羽陸奥」国内にとどまらず、遠く「粛慎挹婁」までが清衡に服していると述べている。

永保三（一〇八三）年に源義家が陸奥国司として赴任した時、清原真衡が「三日厨」（三日間の歓待）を催し、「上馬五十疋」のほかに「金・羽・あざらし・絹布」を義家に献上している。また『吾妻鏡』文治五（一一八九）年九月十七日条によると、藤原基衡が毛越寺を建立する時、仏師運慶への功物は「円金百両」「鷲羽百尻」「水豹皮六十余枚」「安達絹千疋」「希婦細布二千端」「糠部駿馬五十疋」「信夫毛地摺千端」のほか、「山海珍物」であったという。清原真衡の「羽・あざらし」、藤原基衡の「鷲羽」「水豹皮」は、いずれも北方的色彩の濃いもので、清原氏の時代以前から結びついていた北方社会と関わりが、奥州藤原氏の時代には「粛慎挹婁」が藤原清衡に服すという文飾が成立するくらい強いものになったと思われる。

近年の平泉研究では、藤原清衡の政権が成立したのにともなって、平泉は白河関から外の浜にいたる支配圏の中心に位置づけられ、さらに外の浜を窓口にして、北方社会からの特産品が平泉に集積され、さらに畿内へと運ばれていたとみている。

藤原泰衡の敗走と奥大道

文治五（一一八九）年九月、源頼朝は義経をかくまったことを口実に奥州藤原氏を攻撃し、藤原秀衡の子泰衡を滅ぼした。その様子を『吾妻鏡』九月三日条は次のように記している。

泰衡数千の軍兵に囲まれ、一旦命害を遁れんが為に、隠れること鼠の如く、退くこと鵺の如し。夷狄嶋を差し、糠部郡に赴く。此の間、数代の郎従河田次郎に相恃み、肥内郡贄柵（にえのさく）に到る処、河田忽ち年来の旧好を変じ、郎従等をして泰衡を相囲み梟首す。

源頼朝軍に囲まれた泰衡は夷狄嶋（北海道）を目指し、まずは糠部郡に逃れようとして肥内郡贄柵にたどり着いたところで、郎従河田次郎の裏切りで命を落とした。平泉を脱出した泰衡は、奥羽山脈の脊梁沿いに肥内郡贄柵（現鹿角市）に到達した。彼はここで日本海を目指さず、奥羽山脈を横切り糠部郡経由で太平洋岸に出るというコースを選んでいる。追跡の目をくらまそうとしたのであろうか。

この時期、平泉から夷狄嶋を目指すコースは、藤原清衡が中尊寺を創建した時に白河関から陸奥湾の外ヶ浜まで二十余日の路程一町ごとに笠卒塔婆を建てたとされる（『吾妻鏡』文治五年九月十七日条）、「奥大道」であり、現在の東北自動車道とほぼ同じような奥羽山脈の裾野を通るルートをとっていた。青森市西部の石江地区に一〇世紀後半から一一世紀前半にかけての地方官衙に類する新田（1）遺跡が見つかっていることから推すと、一〇世紀後半には「奥大道」の原型が作られていたのかもしれない。泰衡はあえてこの道を外れて追手をまこうとしたのであろうか。

「奥大道」は外ヶ浜が終点であるが、その先の夷狄嶋ルートは不明であるが、その先端の石狩低地帯まで延びていたのは鉄器や銅碗の分布からも確実であろう（笹田朋孝「金属器の普及」）。

第四節　鎌倉幕府と「夷嶋」

征夷大将軍と「夷嶋」支配

文治五（一一八九）年奥州を平定した源頼朝は、建久三（一一九二）年七月征夷大将軍に任ぜられ、名実ともに武家政権が始まった。

ところで征夷大将軍とは、八世紀に朝廷が陸奥の蝦夷を征討するため臨時に派遣する軍隊の総指揮官を意味した。養老軍防令「将帥出征条」によると、兵士三〇〇〇以上を一軍とし、将軍一人を任じ、三軍を編成する時は、一人を大将軍にするとある。

延暦十三（七九四）年大伴弟麻呂が征夷大将軍に任ぜられた例が初見であるが、その後坂上田村麻呂の事績が伝説的に高められ、征夷大将軍といえば坂上田村麻呂が有名となった。

再び征夷大将軍が脚光を浴びるのが、源平の争乱時である。寿永三（一一八四）年正月、源義仲は自らを征夷大将軍に任じた。その直後に討滅された義仲に代わり、頼朝がその補任を望んだが、結局この職に任ぜられたのは後白河法皇没後の建久三年七月であった。

歴史的にみると「征夷」の対象は、古代は陸奥の蝦夷であり、義仲の場合は東国を本拠とする頼朝と推されるが、頼朝の場合は文治五（一一八九）年に実施された奥州藤原氏の追討の完成を期したものとみることができ、「征夷」の対象は奥州藤原氏であり、奥羽から夷嶋に広がる頼朝に服属しない勢力をさすとみることができる。

先にもふれたように藤原泰衡は夷狄嶋への逃亡を考えていたが、実際にこの時『新羅之記録』（松前家の正史、以下『記録』とする）によると、藤原泰衡が追討を受けた際に、多くの人が「糠部津軽」から「陬川」（鵡川）・「與依地」（余市）へ逃げこんだと述べたうえで、

今奥狄の地に彼の末孫狄と為りて之に在りと云々。亦実朝将軍之代強盗海賊の従類数十人搦め捕り、奥州外之浜に下し遣り、狄の嶋に追放せらる。渡党と云ふは渠等が末なり

と記して、東北地方からの逃亡者の子孫が「狄（てき）」（アイヌ）化している。また、なかには三代将軍実朝の時に捕縛され、「狄の嶋」に流された強盗海賊数十人の子孫が、「渡党」となっていると認識されている。すなわち、「渡党」には「奥狄の地」の先住者（擦文人）と血の交流を重ねた結果、和人系アイヌ・アイヌ系和人などの両属的性格をもつものが形成されたのである。

さて実朝の時に強盗海賊が「夷嶋」に流されているが、同じような記事は『吾妻鏡』に散見できる。

表１－２　流刑先としての夷嶋

年月日	流刑者	流刑先
建久5（1194）6・25	獄囚数輩（京師）	奥州
建仁2（1202）3・8	西獄の囚人	奥州の夷
建保4（1216）6・14	東寺の凶賊以下強盗・海賊の類50余人	奥州→夷嶋
嘉禎元（1235）7・23	夜討強盗の枝葉の輩	関東→夷嶋
建長3（1251）9・20	讃岐国の海賊の張本	関東→夷嶋

この表は、京都・西国の犯罪者が「奥州」を経由して「夷嶋」に配流されることを示している。言い換えれば、犯罪者の移送を通して「奥州」・「夷嶋」の「征夷」が徹底されていることがうかがえる。「征夷大将軍」は実体をもった官職だったのである。

東夷成敗権と蝦夷管領

元応元（一三一九）年ごろに成立した『沙汰未練書』に次のような一節がある。

一、六波羅とは、洛中警固并西国成敗御事

一、鎮西九国成敗事、管領、頭人、奉行、六波羅の如く之に在り

一、東夷成敗事、関東に於いて其の沙汰有り、東夷とは蝦子の事也
以上、此の如き御成敗、武家の沙汰と云ふ

東夷、すなわち蝦子（エゾ）に対する成敗（政務執行）は、鎌倉幕府が執り行うが、それは六波羅探題による洛中警固・西国成敗、鎮西探題による鎮西九国成敗と併称されるくらい武家の沙汰として重要なものと認識されていた。

『沙汰未練書』が東夷成敗についてふれた背景は、一四世紀初頭に津軽を戦場とする蝦夷蜂起（安藤氏の乱）があったこと、東夷成敗権にとって安藤氏が蝦夷代官（蝦夷管領）として重要な役割を果していたこと、具体的には安藤氏が「奥州夷」として、直接流刑に関わっていたこと、そして東夷成敗権の実体は、蝦夷地流刑による国外追放ではなく、国家による蝦夷地支配にあったこと、また東夷成敗権は奥州藤原氏をとおして成立したことなどが指摘されている（遠藤巌「中世国家の東夷成敗権について」）。

東夷成敗権は征夷大将軍としての職掌を全うするための重要な権能であり、それを実体化するためには鎌倉幕府は在地の豪族である安藤氏を「奥州夷」として被官化したものと思われる。

江戸時代に塙保己一がまとめた『武家名目抄』には、

蝦夷管領　又蝦夷代官と称す。（略）北条義時武家の執権たりし時に、安藤氏を津軽の夷地に居らしめて、奥羽及渡島の蝦夷に備へ、夷人を管領せられしより、其子孫相伝へて蝦夷鎮衛の代官うけ給はれり

とあり、江戸時代には執権北条義時の時に安藤氏を奥羽・渡嶋蝦夷の備えとして蝦夷管領（蝦夷代官）に任じたと考えられていた。一四世紀に編まれた『保暦間記』には、

東夷ノ堅メニ義時ガ代官トシテ津軽ニ置タリケルガ末也

とあり、また同時代の『鎌倉年代記』には、

蝦夷蜂起の事に依り、安藤又太郎を改められ、五郎三郎を以つて代官職に補し訖んぬ

と語られており、一四世紀前後には安藤氏が北条氏の「代官」と認識されていたことがわかる。

北条氏の荘園の分布をみると、いわゆる北緯四〇度以北の地頭職をほとんど独占しており、こうしたことから『保暦間記』が伝える「義時ガ代官トシテ津軽ニ置」かれたというのは、安藤氏が北条義時の地頭代に補任されたことを意味しているのであろう。すなわち、津軽方面の地頭北条氏が「蝦夷管領」、その地頭代である「奥州夷」安藤氏が「蝦夷代官」と呼称されたのである。

表１－３　鎌倉期陸奥国津軽方面の郡（庄・保）地頭一覧表（『中世奥羽の世界』より作成）

郡・庄・保	郡（庄・保）地頭
糠部郡	三浦氏？ ↓ 北条氏（時頼……秦家）
津軽平賀郡	宇佐美実政？（文治5年） ↓ 北条氏（建久1）（義時…泰時…時頼…長時…貞時…）
津軽山辺郡	宇佐美実政？（文治5年） ↓ 北条氏（建久1）（義時……）
津軽鼻和郡	宇佐美実政？（文治5年） ↓ 北条氏（建久1）（義時……）
津軽田舎郡	宇佐美実政？（文治5年） ↓ 北条氏（建久1）（義時……）
鹿角郡	成田助綱 ↓ ←北条氏？
比内郡	（未詳）
外浜	北条氏（義時……）
西浜	北条氏（義時……）

安藤氏と十三湊（とさみなと）

『記録』によると、安藤氏の先祖は神武天皇が大和を征服する際に抵抗した長髄彦（ながすねひこ）であり、長髄彦が津軽の外之浜安東浦に配流され、その子孫が津軽を支配し、十三湊に居住し大いに繁昌したとある。永享（えいきょう）の乱で勲功

をたて糠部郡を支配した南部義政は、十三湊の安藤盛季の息女を娶った帰り、「津軽は聞きしに増たる善き所なり」と言い、津軽への食指を伸ばし、嘉吉二（一四四二）年に安藤氏を攻撃し、津軽乗っ取りに成功した。

十三湊は貞応二（一二二三）年に編まれた「廻船式目」には、出羽国の秋田とともに三津・七湊の一つに数えられており、鎌倉時代から日本海交易の拠点港であった。のちの史料であるが、『十三湊新城記』には正和年間（一三一二～一七）に十三湊に建てられた安藤貞季の城郭周辺の景観を次のように描写している。

商船は歌を発し艇を扣き、（略）商沽は市を成し、売買先を争う。（略）工は其の業を勤め、商は其の貨を通ず。国大いに富み、人益ます豊か

こうした十三湊の様子は、近年の発掘調査によっても確認されている。一二世紀にはすでに遺構が存在し、その後一三世紀後半には計画的な都市建設が行われ、一四世紀末には町屋などが一気に拡大している。遺構としては、規則化した道路や溝、大きな礎石建物を持つ館、周辺の家臣・職人の屋敷、メインストリートに沿う町屋、大規模な港湾施設・船着場などが発掘され、遺物としては、中国や朝鮮からの輸入陶磁、能登の珠洲焼、古瀬戸などの陶磁器類が見つかっている。

遺構によると、一五世紀中頃には急速に衰退していくが、それは南部氏が、嘉吉二年に十三湊を陥落させたことと符合する。

十三湊は、安藤氏が拠点を置くことにより、北方世界への窓口として急速に発展した。『記録』は、安藤氏が「狄の嶋」を支配する根拠を、

抑も狄の嶋古へ安東家の領地たりし事は、津軽を知行し十三之湊に在城して、海上を隔つと雖も近国たるに依て、此島を領せしむるなり

と述べて、「古へ」から安藤氏が「十三之湊に在城」して、「此島」の「近国」にいたことをその根拠としてあげている。すなわち安藤氏は、十三湊支配が夷嶋領有に直結すると認識していたのである。十三湊支配は、流刑管理権・交易管理権を通して夷嶋領有の淵源となっていたのである。

安藤氏の乱と鎌倉幕府

延文元（一三五六）年ごろに完成した『諏訪大明神絵詞』は、元亨から嘉暦（一三二一～二九）ごろに北奥羽で「東夷」が蜂起したことについて次のように記している。

其子孫ニ五郎三郎季久、又太郎季長ト云ハ従父従弟也、嫡庶相論ノ事アリテ合戦数年ニ及フ間、両人ヲ関東ニ召テ理非ヲ裁決之処、彼等カ留主ノ士卒数千夷賊ヲ催集之、外ノ浜内末部西浜折曾関ノ城郭ヲ構テ相争フ、両ノ城険阻ニヨリテ洪河ヲ隔テ雌雄互ニ決シカタシ、因茲武将大軍ヲ遣テ征伐スト云ヘトモ、凶徒弥盛シテ、討手宇都宮ノ家人紀・清両党ノ輩多以命ヲ堕キ、漸深雪ノ比ニ及ヌ、貞任追討ノ昔ノ如ク年序ヲヤ累ムト、衆人怖畏ヲ致所ニ或夜深更ニ、当社宝殿ノ上ヨリ明神大竜ノ形ヲ現テ、黒雲ニ賀シテ艮ノ方ヲサシテ向給ケル、（略）同夜同時ニ奥州ニ現シ給ケルトソ、後日ニハ注進セシ、爰ニ季長カ従人忽ニ城郭ヲ破却シテ甲ヲヌキ、弓ノ弦ヲハツシテ官軍ノ陣ニ降リヌ、三軍万歳ヲ称シテ則関東ニ帰ケル、

安藤季久と季長の従父兄弟が、「嫡庶」をめぐって相論を起こしたため、鎌倉が理非を裁決するため呼び寄せたところ、留守の間に両軍が「士卒」「数千夷賊」（アイヌ）を集めて「外ノ浜」「内末部」「西浜」「折曽関」に城を構え戦った。鎌倉幕府は大軍を派遣し鎮めようとしたが、多くの軍勢を失った。冬に向かい沈静化したが、安倍貞任の時のように年を重ねることが恐れられた。ところが、深夜に諏訪神社の宝殿から現れた明神が大竜の姿で東北を指し進み、奥州に現れた。これを見た季長の従者は城を破却し、武装解除して官軍に降伏したため、三軍は万歳を唱えて戦を終え、関東に帰っていったのである。

この争乱は、古くから鎌倉幕府の威信失墜を招いたものとして評価されており、仲裁に入った内管領長崎高資は双方から賄賂を受け取り、理非裁決を明らかにせず、さらに嘉暦二（一三二七）年に北条高時は派兵したが、これを討つことができず、幕府と北条氏の権威と実力の失墜が暴露され、その風聞は諸国に伝わった（黒板勝美『更訂国史の研究』各説上）。

さてここで注目されるのは、内紛を起こした安藤季久と安藤季長の双方が、数千の「夷賊」（アイヌ）を動員して戦ったことである。これは安藤氏の支配が「狄の嶋」のアイヌにまで軍事編成・動員が及んでいることを示すものである。ただこの関係も建治元（一二七五）年ごろに安藤五郎が「頸をばゑぞ（蝦夷）にとられぬる」（『日蓮遺文』）ことがあったように、不安定なものであったことがうかがえる。

「北からの元寇」とアイヌ

一三世紀初頭、チンギス＝ハンはモンゴル民族を統一したが、孫のフビライ＝ハンは中国大陸を南下し、都を大都（北京）に遷し、国号を元と改め、一二七九年には南宋を滅ぼした。

元は文永五（一二六八）年以後たびたび使節を日本へ遣わし、朝貢を求めたが、幕府はそれを拒否し防備に努めた。結局、文永十一年と弘安四（一二八一）年に元の襲来を受けることになる。

ちょうど同じころ、北方社会のサハリンにも元軍が来襲してきた。『元史』至元元（一二六四）年十一月辛巳条に、

骨嵬（くい）を征す。是より先、吉里迷（ぎれみ）内附し、言わく、其国東骨嵬・亦里于両部有り、歳に来りて疆（さかい）を侵すと。故に往きてこれを征す

とある。「骨嵬」（gu-wei）はアイヌのことで、アムール川下流域の諸民族などがサハリンに住んでいるアイヌ民族を「ku-gi」・「ku-yi」と呼んでいたことによる。また「吉里迷」（jilimi）はアムール川最下流域からサハリンに住むギリヤークで、オホーツク人にも比定され、「亦里于」（yiliyu）についてはウイルタとの説もあるが不詳である。

この記事によると、至元元（一二六四）年に蒙古軍が服属したギリヤークの求めにより、侵攻をくりかえすサハリンのアイヌを征討したことがわかる。これ以降二〇年間、アイヌを攻撃した記事は見当たらないが、弘安の役直後の至元二一年には、元軍がアイヌを討ち、以後三年間元軍はアムール川下流域からサハリンにかけて侵攻し、とくに至元二三年の征討は、「兵万人・船千艘」という大軍による征討であった。こうした元軍の動きに対してアイヌ側は大徳元（一二九七）年以降、「瓦英」「王不廉古」がシベリア大陸側に渡り、元軍と衝突している。しかし、至大元（一三〇八）年アイヌはついに服属する。「玉善奴」「瓦英」らが投降し、「毎年異皮を貢ぐ」ことにしたのである。

元はなぜサハリンに侵攻し、またアイヌはなぜ抵抗したの

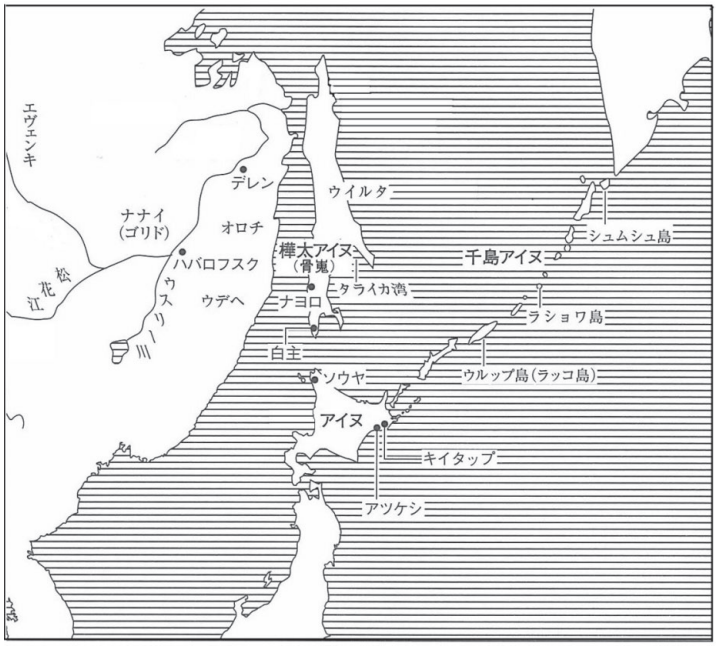

図１－２　北方社会の民族分布（菊池勇夫『アイヌ民族と日本人』）

か。その答えは、アイヌが「毎年異皮を貢ぐ」ことからうかがうことができる。「異皮」とはめずらしい・すぐれた皮を意味し、サハリンからシベリアにかけて分布するテン・キツネなどの陸棲、アザラシ・ラッコなどの海棲動物の皮がそれにあたり、それらをめぐる争いがあったのである。

また大徳元（一二九七）年にアイヌが大陸に侵攻した際、「打鷹人を虜掠」しようとした（『元文類』巻四一、経世大典序録）。「打鷹人」はタカを捕らえる技術者集団で、アイヌが彼らを捕虜にしようとしたのは、タカやワシを交易品として入手したかったからであろう。

アイヌは「異皮」や「鷹」を手に入れる過程でギリヤークとトラブルを起こし、さらにギリヤークを支配下に入れようとする元に抵抗したのであろう。

元軍と戦ったアイヌの拠点はどこであろうか。一三世紀後半に一万の元軍を相手にアイヌが戦っていることから推察すると、一一、一二世紀にアイヌは、北海道からサハリンへ移住し、コロニーを形成していた可能性は十分にある（瀬川拓郎『アイヌの歴史』）。至大元年に投降した「玉善奴」「瓦英」らアイヌのリーダーは、サハリンを拠点に北方世界の産品を入手し、それを夷嶋・十三湊に交易する活動を展開していたのであろう。

鎌倉後期の北方社会は北奥羽の安藤氏の争乱、サハリンの元の来襲といずれもアイヌが関わっていた。

第五節　和人社会の成立とコシャマインの戦い

『諏訪大明神絵詞』とアイヌ社会

一四世紀初期の鎌倉時代末期に北奥で起こった安藤氏の争乱について語る『諏訪大明神絵詞』は、アイヌの風俗に関する初見史料でもある。同史料によると、

蝦夷カ千島ト云ヘルハ、我国ノ東北ニ当テ大海ノ中央ニアリ、日ノモト・唐子・渡党、此三類各三百三十三ノ島ニ群居セリト、一島ハ渡党ニ混ス、其内ニ宇曾利鶴子別ト萬堂宇満伊犬ト云小島トモアリ、此種類ハ多ク奥州津軽外ノ浜ニ往来交易ス

とある。北海道は「蝦夷カ千島」と呼ばれているように、多くの島からなっていると認識されており、そこには「日ノモト」・「唐子」・「渡党」の三類が住み、「渡党」には「宇曾利鶴子別」（函館か）と「萬堂宇満伊犬」（松前か）という小島があり、この種類は「奥州津軽外ノ浜」に交易に出かけていた。

日ノモト・唐子ノ二類ハ其ノ地外国ニ連テ、形躰夜叉ノ如ク変化無窮ナリ、人倫禽獣、魚肉ヲ食トシテ、五穀ノ農耕ヲ知ス、九沢ヲ重ヌトモ語話通シ堅シ、渡党ハ和国ノ人ニ相類セリ、但鬢髪多シテ、遍身ニ毛ヲ生セリ、言語俚野也ト云トモ大半ハ相通ス

「日ノモト」・「唐子」は外国に通じており、「日ノモト」はのちの東蝦夷で、太平洋沿岸を東上し、千島列島に連なるアイヌを指し、「唐子」はのちの西蝦夷で、日本海沿岸を北上し、樺太に連なるアイヌを指すと考えられている。彼らは漁撈・狩猟を生業とし、農耕文化を持たないという。まったく農耕を知らなかったとは思えないが、樺太アイヌ（骨嵬）が「異皮」「鷹」に関わっていたことを想起すると、彼らの一面を指摘したものと言えるだ

ろう。彼らとは通訳を置いても言葉を通じさせることは難しかったが、「渡党」は和人と類似しており、多毛であるが言葉の多くは通じたという。

彼らの文化については次のように記している。

戦場ニ望ム時ハ丈夫ハ甲冑・弓矢ヲ帯シテ前陣ニ進ミ、婦人ハ後塵ニ随ヒテ木ヲ削テ幣帛ノ如クニシテ、天ニ向テ誦呪ノ躰アリ、男女共ニ山壑ヲ経過スト云トモ乗馬ヲ用ス、其身ノ軽キ事飛鳥・走獣ニ同シ、彼等カ用ル所ノ箭ハ遺骨ヲ鏃トシテ毒薬ヲヌリ、纔ニ皮膚ニ触レハ其人斃スト云事ナシ。

彼らは戦闘の時、男子の後方で女子が木幣をもって呪文を唱える。これはアイヌ語で「ウケエホムシュ」という戦陣誦呪に酷似する。また乗馬の習慣がなく、とくに弓矢の骨鏃に毒矢を用いている。トリカブト毒なのかは不明であるが、いずれも近世アイヌの文化的特徴と一致する。

一三世紀ごろには東国あたりでアイヌ文化の成立を認識していたとみなして間違いないであろう。

道南十二館の展開と交易

「渡党」が和語を理解できたのは、『記録』によると、「奥狄の地」の先住者（擦文人）と血と文化の交流を重ねた結果、和人系アイヌ・アイヌ系和人などの両属的性格をもつものが作り出された結果と考えられる。彼らのなかから道南の港湾適地（『諏訪大明神絵詞』の「島」）に拠り、北奥の安藤氏との臣従関係をテコにしながら、流配・交易などの業務を執行する有力者が生み出された。「道南十二館」の館主には彼らの系譜をひくものもいたであろう。

表１－４　道南十二館と館主

館名	館所在地	館主名
志濃里館	函館市志苔町	小林良景
箱館	函館市元町	河野政通
中野館	木古内町中野	佐藤季則
脇本館	知内町湧元	南条季継
穏内館	福島町吉岡	蒋土季直
覃部館	松前町東山	今泉季友
大館	松前町西館	下国定季
祢保田館	松前町館浜	相原政胤
原口館	松前町原口	近藤季常
比石館	上ノ国町石崎	岡部季澄
茂別館	北斗市茂辺地	厚谷重政
花沢館	上ノ国町上ノ国	下国家政
		蠣崎季繁

館主の来歴は不詳の場合が多いが、『記録』によると享徳三（一四五四）年、武田信広が下北半島の大畑から夷嶋に渡る時に同行した名前に相原政胤と河野政通がみえる。河野政通は伊予国の水軍である河野（越智）氏の出自という見方があるが、津軽・下北に「蠣崎」「相原」「薦槌」の地名がみえることからすると、館主の多くは南部・津軽に関係をもったもののようである。

彼らは海岸線に拠点を築き、「渡党」域内、さらに「日ノモト」・「唐子」との交易を行っていたのであろう。一四世紀に完成した『庭訓往来』に「宇賀昆布」「夷鮭」がみえるが、宇賀が函館付近の旧名であることから推すと、いずれも夷嶋の交易品であった。また応永三十（一四二三）年「安藤陸奥守」（康季か）が足利義量の将軍就任祝いに、「馬二十匹、鳥五千羽、鵞眼二万匹、海虎皮三十枚、昆布五百把」を献上した。このうち海虎（ラッコ）はおもに千島列島に生息し、また鳥が鷹もしくは鷲だとすると、夷嶋から樺太・沿海地方に生息する。これらを入手するためには「外国ニ連」なる「日ノモト」・「唐子」との交易によったものと思われる。

北方世界の交易と日本海交易の結節点にあったのが「道南十二館」であったと想定される。昭和四十三（一九六八）年に函館市志海苔町で一四世紀後半から一五世紀初頭に埋蔵された三個の大甕から三七万枚以上の古銭が発見された。埋蔵地に隣接する志濃里館が日本海と北方世界を中継する集散地であったと考えられる。おそらくほかの館も同じような機能をもっていたとみて間違いないであろう。

古代では石狩低地帯が本州との交易の中心にあったが、一三世紀以降、その中心は道南地方の館に移行したようである。千歳市の美々川支流の美

沢川左岸の低湿部から台地上に美々８遺跡がある。この遺跡は、太平洋側と日本海側を結ぶ河川交通の中継点にあり、中・近世のアイヌの建物跡・もの送り場・船着場や、板綴船・櫂・キテ・マレク・弓矢などが見つかっている。こうした集落が枝葉ルートとして、「道南十二館」に集約され、新たな交易体制のなかに組み込まれたのであろう。

安藤氏の往還と「三守護体制」の成立

嘉吉二（一四四二）年に南部氏の追撃によって、夷嶋に没落した安藤氏は、そののち津軽奪還を試みるが結局失敗する。これが十三湊安藤氏の滅亡である。しかし系図が示すように安藤氏全体が滅亡したわけではなく、湊安藤氏、檜山・秋田安東氏、夷嶋下国安藤氏の系統がそれぞれ展開したのである。

とくに安藤政季は十三湊が陥落する時に助命され、のちに田名部を知行し家督を継いだ。詳細は分からないが、享徳三（一四五四）年に武田信広らとともに夷嶋にわたったが、康正二（一四五六）年、安藤尭季は「一家の旧交を以て」安藤政季を呼びよせ、息男忠季の代に河北千町を知行し、「檜山の屋形」として繁栄した。

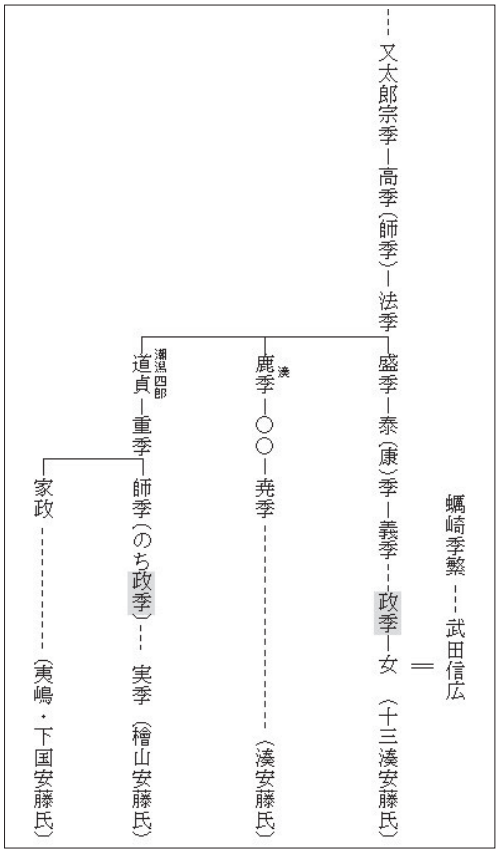

図１－３　安藤氏系図

ところで政季は康正二年、夷嶋を離れるにあたり、渡島半島先端部を三分割し、「三守護体制」のもとに組みこんだ。『記録』によると、「下之国」（松前以東より函館まで）、「松前」、「上之国」（松前以西より上ノ国まで）の三地域に分割し、それぞれの館主を守護・副守護にすえた。「下之国」の守護には茂別館の下国家政（安藤政季の弟）、副守護には箱館の河野政通、「松前」の守護には大館の下国定季（安藤政季の親族か）、副守護には相原政胤、「上之国」の守護には武田信広（安藤政季の婿）、副守護には蠣崎季繁（安藤政季の婿）を任じた。

下国家政・下国定季は政季と親族関係にあり、河野政通・相原政胤は政季が下北半島から渡海する時に同行し、しかも政の字の偏諱を受けている。また上之国の信広と季繁は安藤氏と婚姻関係を結んでいる。いずれも安藤政季と臣属関係を結んでいたのである。政季が夷嶋を離れるにあたり、この臣属関係をテコに安藤氏－守護（館主）－副守護（館主）の政治的序列化を築こうとしたのであろう。

コシャマインの戦い

安藤政季が「三守護体制」を導入し夷嶋を離れると、それを待っていたかのようにアイヌの反乱が起こった。『記録』によると、

中頃内海の宇須岸夷賊に攻め破られし事、志濃里の鍛冶屋村に家数百有り、康正二年春乙孩来て鍛冶に劚刀を打たしめし処、乙孩と鍛冶と劚刀の善悪価を論じて、鍛冶劚刀を取り乙孩を突き殺す。之に依て夷狄悉く蜂起して、康正二年夏より大永五年春に迪るまで、東西数十日程の中に住する所の村々里々を破り、者某を殺す事、元は志濃里の鍛冶屋村に起るなり。活き残りし人皆松前と天河とに集住す

とある。宇須岸（函館）がアイヌに攻略されるきっかけは、康正二（一四五六）年、志濃里の鍛冶屋村で乙孩（アイヌの少年）が注文した劔刀の善悪をめぐるいさかいが起り、鍛冶屋が乙孩を刺殺したことによる。この結果、康正二（一四五六）年より大永五（一五二五）年まで、アイヌが蜂起し、松前から東西数十日の所に居住する者某（和人）は殺害され、生き残ったものは松前と天河（上之国）に集住したという。

この劔刀をめぐるエピソードは象徴的である。すなわちアイヌ社会では少年が鉄を所有するほど大量に流通していること、しかしその製造・加工は和人の技術に依存していること、おそらく和人が技術力を独占することによって生じる不平等はアイヌに大きなストレスを与えたはずである。こうした要因がアイヌの戦いの背景にあったのである。

さて、『記録』はこのあと長禄元（一四五七）年、アイヌが、志濃里館の小林良景、箱館の河野政通、中野館の佐藤季則、脇本館の南条季継、穏内館の蒋土季直、覃部館の今泉季友、松前守護の下国定季・相原政胤、祢保田館の近藤季常、原口館の岡部季澄、比石館の厚谷重政を次々と攻め落とし、わずかに下之国の守護下国家政と上之国の蠣崎季繁が踏みとどまったことを述べたうえでつぎのように記している。

> 其時上之国の守護信広朝臣惣大将として、狄の酋長胡奢魔（こしゃまいん）犬父子二人を射殺し、侑多利（うたり）数多を斬殺す。之に依て凶賊悉く敗北す。

武田信広が総大将として、「道南十二館」のうち十館を陥落させたアイヌのリーダーコシャマイン父子を射殺した。『松前家記』にはその状況をさらに詳しく述べている。総大将に選ばれた信広は、六月二十日に残兵を集めて東進したが、七重浜（北斗市）の戦いで苦戦をしいられた。朽木の洞に隠れた信広は追いかけてきたコシャマイン父子を巨矢で射ち殺し、さらに数人の首長を斬り殺した。これを転機に信広軍は進撃を開始し、ついに「余衆潰散（よしゅうかいさん）、諸部震慴」させたのである。コシャマインは信広の気転によって討たれたというのである。これ以降たびたび、アイヌは和人の策略によって討たれるというステレオタイプ的表現が使われるが、これはその初見例である。

ところで、コシャマインの経歴についてはまったく不詳であるが、『松前家記』によると「東部の酋長」とある。またコシャマインが志濃里館を陥落させたあと、西へ進撃していることから、彼の本拠地は渡島半島の東部、おそらくは噴火湾側にあったとみられる。いずれにしろコシャマインはアイヌ史上、初めて個人名で現れる人物であった。

「始祖」武田信広

『記録』・家譜などによると、武田信広は若狭の武田信賢の子として生まれたが、世継問題に巻き込まれ、宝徳三（一四五一）年、若狭を脱出し、足利経由で享徳元（一四五二）年、下北半島の田名部に来て、蠣崎を知行した。そこで安藤政季と同心し、享徳三年、夷嶋にわたり、蠣崎季繁がいる「上之国」に寄留することになったという。そして信広はコシャマインの戦いの軍事的勝利をテコに、蠣崎氏・安藤氏との結びつきを深め、蠣崎季繁の養女（安藤政季の息女）を娶り、蠣崎氏の家督を継承し、「蠣崎」信広を名乗ることとなった。もとは若狭武田氏の嫡系であった信広が、世継問題から命からがら若狭を脱出し、流浪の末に夷嶋にわたって成功するという、まさに貴種流離譚的な経歴である。

信広が上昇する転機となったのは、コシャマインの乱の「勇功」であったが、後の史料によると、信広は、夷嶋の「海帯」（昆布）を若狭に送り出す海商的存在として描かれている（『蝦夷島奇観』付録）。信広は、下北半島と夷嶋の海峡交易に従事しながら、実力を蓄えた海の豪族とみたほうが実相に近いだろう。信広のように、武芸だけではなく交易に優れた才能を

持つものが、北方社会の勝者として生き残ったのである。

ところで、信広が明応三（一四九四）年に死去する際、『記録』に「康正二年より治世三十九年」とあり、康正二（一四五六）年を信広の治世、すなわち松前家の始点におく見方がある。康正二年というのは、「三守護体制」が成立し、「上之国」の守護に武田信広、副守護に蠣崎季繁を任じた年である。

この時点で信広が蠣崎季繁の上位に立つことになるはずであるが、『記録』によると、乱平定後の長禄元（一四五七）年に「下之国」の守護下国家政が「上之国」の蠣崎季繁のもとへ、「献酬の礼」（盃を酌み交わす儀）を行なうためにやってきた。その際、家政は刀を信広に「授」（目上の者が目下の者に物を与える）け、季繁は喬刀（たち）を信広に「授」けた。それに対し、信広は家政に大刀を「進」（目上の者に物を差し上げる）じている。すなわち、『記録』によると、長禄元年の段階で家政と季繁は、身分的に信広の上位にあることになり、武田信広が「上之国」の守護とする記事には矛盾があることになる。

ちなみに他の文献は信広の治世の始期をどのようにみているのであろうか。『福山秘府』は、コシャマインの乱後、信広が「時に親族に会いてほぼ建国之大礼を行なう」と伝え、『松前志』は、「長禄元年藩祖清巌公大に夷賊を討て此地を定め、万世の基を開き」とする。いずれもコシャマインの乱を鎮めた長禄元（一四五七）年を武田信広の治世の始点としているのである。

勝山館と夷千島王遐叉（かしゃ）

明治十一（一八七八）年に編纂された『松前家記』によると、コシャマインの乱が治まる直後の長禄元（一四五七）年七月に「始メテ国ヲ建ツ、是ヨリ諸豪皆信広ニ臣事ス」とあり、信広による建国が行なわれ、諸豪族が臣事した。さらに八月に「新城ヲ天王河北ニ築キ勝山ト名ケ信広徒ル」とみえ、信広は新たに造営した城を勝山と名づけ、そこに移ったという。これが上ノ国町の勝山館である。これによると勝山館は長禄元年に創られたことになるが、考古学的にはもう少し新しい一五世紀の第四・四半世紀ごろに造営されたといわれている。

『福山秘府』は文明五（一四七三）年条で『松前年代記』を引用して、「是歳八幡宮を上国館の上に造立し館神と称す」と記している。上国館が勝山館を指すとすると、この年に八幡宮が館神（館の守護神）として建立されることにより、勝山館が本格的に完成したことになる。寛正三（一四六二）年五月十二日に蠣崎季繁が死去することにより、自立した信広が蠣崎家の家督継承者として新拠点を構想したのであろうか。

勝山館は、標高七〇～一一〇㍍ほどの南北に延びる尾根の上に造られている。館の入り口には切岸（きりぎし）・柵列・二重の空堀・橋が設けられており、堅固な館となっている。館の内部には館主が住み、客と対面した客殿と呼ばれる大きな建物のほか、銅細工・大鍛冶・小鍛冶などの手工業者の竪穴建物、井戸なども見つかっている。

勝山館は、和人勢力の前進基地としてのみみられがちであるが、館跡からはアイヌの狩猟・漁撈具である骨角器が大量に出土し、またシロシ（印）が刻まれたマキリ鞘、陶磁器が見つかっている。さらに後背地の夷王山墳墓群から、伸展葬東頭位で太刀・漆器・骨角器を副葬し、両耳に耳飾りを装したアイヌの墓が見つかっている。この館はアイヌと和人が混住しており、館の複雑な様相を呈している。

館外の大澗湾や天ノ川河口部に港湾施設が設けられ、本州・北方社会との交易の拠点になっていたことが想定できる。『福山秘府』文明十七（一四八五）年条には「是歳、北夷瓦硯を出す。是東漢魏曹孟徳築く所の銅雀

台の瓦也（略）硯今秘庫に存す」とあり、「北夷」（樺太アイヌ）が銅雀台の瓦硯を献上しているが、この献上先が勝山館とみられる。一五世紀末には勝山館が北方社会との交易の拠点になっていたことがうかがえる。

さて、勝山館が造営されて間もない一四八二（朝鮮・成宗十三）年、『李朝実録』に夷千島王遐叉が朝鮮国王のもとに使者を派遣したという次のような記事がある。

南閻浮州東海路夷千島王遐叉、朝鮮殿下に呈上す。朕が国元仏法無く、扶桑と通和より以来、仏法有るを知りて、今に三百余歳。扶桑有る所の仏像・経巻、悉く求めて有り。扶桑元大蔵経無し。此を以って未だ得ざること久し。之を貴国に求めんと雖も、海天遥かに遠く、音塵通じ難く、因循して今に至る。聞くならく扶桑元貴国の仏法伝わり、朕が国又扶桑の仏法伝わる。之に由り之を観るに、朕が国の仏法、亦貴国の東漸也。俯して大蔵経を賜り、以って朕が三宝を全からしめば、貴国の王化仏法、遠く東夷を衣被する者也。若し賜わりべくんば重ねて、幣帛を厚く使舩を遣わさん。朕が国卑拙と雖も、西裔は貴国に接す。之を野老浦と謂う。聖恩を蒙ると雖も、動もすれば返逆を致す。若し尊命を承らば、罰を以って其の罪を征伐せんてへり。朕が国人言語通じ難し。国中に命じて扶桑人を専使と為さん。

夷千島王遐叉が仏教興隆のために朝鮮国王に使者を派遣し、大蔵経（全仏教聖典）の下賜を求めたのである。この使節については対馬の王が派遣した偽使とする見方があるが、それを措いても、「夷千島」が「東海」（日本海）をはさんで「朝鮮」と向かいあい、さらに「朝鮮」の沿海地方にある「野老浦」とは「夷千島」の西側で接しているという地理認識をもっていることは注目される。

一四七一（朝鮮・成宗二）年に朝鮮の外交官であった申叔舟が、国王の命により日本・琉球の国情および地理を編んだ『海東諸国紀』には、「日本」は「東海」中にあり、「黒龍江の北を始め、我が済州の南に至り、琉球と相接し其の勢甚だ長」いと記している。また同書所載の「海東諸国総図」には「夷島」から「琉球」までが描かれており、「夷千島」（夷島）が「東海」の北に位置し、朝鮮から北周りで行けるという『李朝実録』の認識と同じである。

『李朝実録』にみえる地理認識は、事実に基づいたものと思われ、たとえ今回の遣使が偽使だったとしても、「夷千島」の「王」が使者を派遣する客観的状況があったとみることができる。勝山館を拠点とする「夷千島」の交易活動（その場合活動の中心に蠣崎信広がいた）が「東海」を北上し「北夷」、さらに「東海」の対岸沿海地方「野老浦」にまで及んでいたのではないか。そうした情報が朝鮮王朝にもたらされていたからこそ、「夷千島王遐叉」の遣使をとりあえず受け入れたのであろう。

アイヌと和人の戦い

『記録』には、「康正二年夏より大永五年春」までアイヌの戦いが連続的に起こり、その結果「活き残りし人皆松前と天河とに集住」したとある。ところが『松前旧事記』には「同五乙酉年三月東西蝦夷蜂起して人民殺さる。是より活き残れる者、松前並びに天河に集住居ス」とあるように、実は大永五（一五二五）年に大規模な東西のアイヌの戦いがあり、その結果「松前並びに天河」に和人が集住することになったのである。

この戦い以外に永正十二（一五一五）年、東部アイヌが蜂起しているが、蠣崎光広は「計略」をたてアイヌの「酋長」ショヤ・コウジ兄弟を松前大館に「招き入れ」斬殺した。享禄元（一五二八）年五月の深夜に蠣崎良広は、風雨に乗じて大館に忍び入ろうとしたアイヌを「用心」により射殺した。同二年三月にはアイヌが上之国和喜館を攻め落そうとしたが、ちょうどそこにいた良広が、「陰謀」により和睦し、「酋長」タナサカシを射殺し、

数百のウタリすべてを池に追いこみ討殺した。同四年五月、良広が松前大館に西沢の小橋から侵入しようとしたアイヌを射殺した。さらに天文五（一五三六）年六月には年来の仇敵で、良広の命を狙っていたタナサカシの聟（むこ）タナリコ夫婦を「和睦」の酒席で一刀両断にした。この結果、「国内東西安全」になったという。『記録』では光広や良広の智略により難局を切り抜けたと描写しているが、むしろアイヌ民族は、コシャマインの戦い以後も各地で戦いを繰りひろげ、時には松前大館まで攻撃を仕掛けていたことに注目すべきである。すなわち、「東西数十日程」に広がっていた「者某」（和人）の居住域が七〇年ほどの戦いのなかで、「松前天河」に縮小した。蠣崎氏は完全に劣勢に立たされていたのである（村井章介「中世国家の境界」）。

一方、蠣崎氏内部でも分裂の動きがあった。四代季広の時に上之国の泊館主蠣崎基広（三代良広の弟高広の子）は、「当国を取り持たんがため」季広が帰依している僧に呪詛（じゅそ）を頼んだが成功しなかった。数年経過した天文十七（一五四八）年、季広が上之国に行く時、僧も同行し山中で殺害しようとしたが果たせなかった。その後、天河の毘沙門堂で僧は季広にすべてを告白したので、基広の頸をはねたという。内紛の理由は不詳であるが、基広が良広にかわって「当国を取り持」とうというのは、季広の家督を簒奪しようとしたと思われるが、両者の間には単なる権力争いではなく、圧力を加えるアイヌ民族に対する政策上の対立があったと推定できる。

蠣崎氏の支配と「夷狄之商舶往還之法度」

武田氏は、蠣崎氏や安藤氏との姻戚関係をテコに勢力基盤の伸張に努めたが、アイヌとの戦いにおいて劣勢に追い込まれると、安藤氏やさらに若狭武田家との関係強化に腐心した。

明応五（一四九六）年、松前の下国恒定が「行跡甚だ荒くして無罪の者数多く誅伐」するため、檜山の安藤氏に訴えたところ、安藤氏が「討手を下し遣し、（略）生害」させる事件があった。おそらく蠣崎氏が安藤氏の軍事力を利用しながら下国氏を討ったものと思われるが、これは檜山に引き下がった安藤氏が夷嶋に隠然たる影響力をもっていることを示している。

さらに永正十一（一五一四）年、二代蠣崎光広と良広の父子が上之国から松前にその拠点を移した。このことは蠣崎氏が安藤氏に三度の使者を派遣することによって、かろうじて「狄の嶋を良広に預け賜ひ、宜しく国内を守護すべきの由」との書状を手に入れることができたが、その条件は「諸州より来る商舶旅人をして年俸を出さしめ、過半を檜山に上る」というものであった。蠣崎氏が「国内を守護」する権利を獲得するために、諸国の商人がもたらす「年俸」の過半を安藤氏に収めなければならないというものであった。

天文十五（一五四六）年、出羽の河北郡深浦森山の館主飛騨季定が乱を起こしたが、蠣崎季広は安藤尋季（ひろすえ）の求めに応じて軍勢を派遣した。また同十七年に季広は、その出自と称する若狭国の武田信豊のもとに使者を遣わし、初めて本宗家との関係を取り結んだ（ただし次の代まで毎年書状を交換するにとどまった）。

こうした一連の動きは、「松前並天河」に封じこまれた蠣崎氏が安藤氏・武田氏のもつ影響力を利用することにより、その地位を強化しようとしたものである。

その点で天文十九年（翌二〇年説もある）の「東公の嶋渡」と「夷狄の商舶往還の法度」は蠣崎氏にとって画期的な意味があった。

「東公の嶋渡」は、檜山の屋形安藤尋季の嫡男舜季が夷嶋視察のために来島したことをいう。この時、蠣崎氏と舜季との間に約諾が成立した。一

つは、舜季の次男茂季を婿とすることと、津軽の北郡司喜庭秀信を婿とすることであった。これは安藤氏や津軽の豪族との関係強化を図り、アイヌに対する備えとしたものであろう。

もう一つは、「夷狄の商船往還の法度」を舜季に認めさせたことである。この法度はまず、勢田内（瀬棚）のハシタインを上之国天の川におき「西夷の尹」とし、志利内（知内）のチコモタインを「東夷の尹」とした。すなわちこれにより、西部アイヌの前線が上之国まで南下し、志濃里・宇須岸周辺にあった東部アイヌの前線が志利内まで西進した。まさに和人の「松前並天河」の集住が制度的に実現したのである。

その意味で永正十一（一五一四）年、蠣崎光広と良広の父子が上之国から松前にその拠点を移したのは、松前が夷嶋の東西を扼する重要な場所にあったということにもよろうが、西部アイヌの圧力を直接受ける上之国を避けたということも見逃せないであろう。

さてこの「法度」では、諸国から交易にくる商人には「年俸」をださせ、それを「夷役」としてハシタインとチコモタインに配分することにした。おそらくこれは、蠣崎氏の渡島半島支配に圧力を加えるアイヌ側への譲歩であり、懐柔であろう。

これ以降、西部アイヌの商船と東部アイヌの商船はそれぞれ、天河の沖と志利内の沖で「帆を下げ休んで一礼を為して往還する事」になったという。『記録』はこれを蠣崎季広を「慫慥」（おそれ敬う）させるためのものとしているが、実際は東西のアイヌ民族にハシタインとチコモタインがアイヌのリーダーであることを認知させる「礼帆」だったのであろう。その点から推すと、アイヌ社会の「酋長」層は、蠣崎氏との結びつきによってその地歩を確保していることに注目される。

「夷狄の商船往還の法度」を導入することにより、アイヌ民族は和人を渡島半島の「松前並天河」に封じこめることに成功した。しかし、「夷役」制の適用により、アイヌ「酋長」層は大きな経済的利益を得たものの、これは日本海に展開する中世的交易秩序に組み込まれることにより得られるもので、コシャマインの戦いの背景にあった不均等な交易を改善するものではなく、むしろアイヌ民族の主体性が削がれ、以後アイヌ社会は、さらに日本社会への依存を強めることになるのである。

一方、蠣崎氏は統一政権の覇者との関係を強めていく。天正六（一五七八）年、季広の五男正広は、熊野参詣の途次、安土城で織田信長に謁し、天正十八年に蠣崎慶広は、京都で豊臣秀吉に謁し、従五位下民部大輔に任ぜられる。文禄二（一五九三）年、慶広は九州名護屋の行営で秀吉から「国政之御朱印」を与えられた。松前・アイヌへの統治権・交易管理権を秀吉が保障するという内容であるが、これにより松前藩の原形が出来あがった。

秀吉の死後の慶長四（一五九九）年十一月、慶広は大坂で徳川家康に謁し、地図と系図を献じ、この時蠣崎氏を松前氏と改めたのである。かくして名目的にも松前藩はスタートするのである。

参考文献

天野哲也「古墳の築かれなかった地域－北海道」川上邦彦編『古墳時代の研究』13巻　雄山閣　一九九三年／同「オホーツク文化とは何か」新北海道の古代２『続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社　二〇〇三年／網野善彦他『北から見直す日本史』大和書房　二〇〇一年／入間田宣夫他『北の内海世界』山川出版社　一九九九年／榎森進『アイヌ民族の歴史』草風館　二〇〇七年／遠藤巌「中世国家の東夷成敗権について」『松前藩と松前』九　一九七六年／大石直正他　日本の歴史14『周縁から見た中世日本』講談社　二〇〇一年／同『中世奥羽の世界』東京

大学出版会　一九七八年／海保嶺夫編『中世蝦夷史料』三一書房　一九八三年／同『中世の蝦夷地』吉川弘文館　一九八七年／同『エゾの歴史』講談社　一九九六年／金田一京助「アイヌ概説」『金田一京助全集』12巻　三省堂　一九九三年／菊池勇夫『アイヌ民族と日本人』朝日新聞社　一九九四年／河野広道『苫小牧古代史』苫小牧教育委員会　一九五四年／黒板勝美『更訂　国史の研究』各説上　岩波書店　一九三九年／熊田亮介「蝦夷と蝦狄」高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館　一九八六年／斉藤利男「『北の古代末期防御性集落』の成立・発展・消滅と王朝国家」天野哲也他編『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館　二〇〇七年／笹田朋孝「金属器の普及」新北海道の古代3『擦文・アイヌ文化』北海道新聞社　二〇〇四年／鈴木信「北海道式古墳の実像」野村崇・宇田川洋編　新北海道の古代3『擦文・アイヌ文化』北海道新聞社　二〇〇四年／鈴木靖民「平安後期の北奥社会」『歴史地理教育』10月号　二〇〇四年／瀬川拓郎『アイヌの歴史』講談社　二〇〇七年／関口明『古代東北蝦夷と北海道』吉川弘文館　二〇〇三年／同「防御性集落に関する一、二の考察」佐伯有清編『日本古代中世の政治と宗教』吉川弘文館　二〇〇二年／祖父江孝男他編『改訂文化人類学事典』ぎょうせい　一九八七年／高木崇世芝『北海道の古地図』㈱五稜郭タワー　二〇〇〇年／高橋富雄『蝦夷』吉川弘文館　一九六三年／武廣亮平「『独犴皮』についての一考察」『日本歴史』六七八　二〇〇四年／田村俊之「道央部のアイヌ文化」野村崇・宇田川洋編　新北海道の古代3『擦文・アイヌ文化』北海道新聞社　二〇〇四年／津田左右吉「粛慎考」『津田左右吉全集』第2巻　岩波書店　一九六三年／中村和之「元代の中国史料にみえるアイヌの記述を読む」北方文化を語る会月例発表会　一九九三年／日本考古学協会編『北日本の考古学』吉川弘文館　一九九四年／蓑島栄紀「北海道と胆振地方の古代史」『北海道発知恵の仕事力』中西出版　二〇〇九年／村井章介他『北の環日本海世界』山川出版社　二〇〇二年／『角川日本地名大辞典Ⅰ　青森』角川書店　一九八五年／北海道文化財保護協議会『柏木1遺跡』一九七一年／道埋文『ウサクマイN遺跡』二〇〇一年／同『西島松5遺跡』二〇〇二年／同『ユカンボシ15遺跡』一九九七年